

# 辞世

～その刻、  
先人たちは何を思ったのか～

## 第2首目 伊達 政宗



### くもりなき 心の月を さきたてて 浮世のやみを はれてこそゆけ

(先の見えない戦乱の時代を、曇りのない心の月を道しるべとして、浮世の闇を晴らして歩んだ生涯であった)

#### ——なぜ人は、彼にひかれるのか

ドラマやゲームなどでしばしば脚色化されているため、この戦国武将の知名度は幅広い世代で高いが、実際の彼の生涯を詳しく知る人は案外少ないのではないかと思う。

伊達政宗は永禄10年(1567)に、米沢城主の長男として生まれた。幼少の頃天然痘にかかり右眼を失明するも、18歳で家督を相続。東北南部を統一したが、時代の波には逆えず豊臣秀吉の旗下に参じる。以後伊達家の存亡に関わるいくつかの苦難を乗り越え、関ヶ原の戦い・大坂の陣では徳川方について戦功をあげ、最期は仙台藩藩祖として70歳で没した。

「独眼竜」の異名を持ち恐れられた一方、文化人としても知られ、詩歌・書・能・茶道などをたしなんだほか、食通でお洒落だったという逸話も伝わっており、多趣味・多才な人だったことがうかがわれる。また近年では、ローマ教皇のもとへ慶長遣欧使節団を派遣した視野の広さにも注目が集まっており、つまるところ戦国武将としての波乱の生涯に加え、様々な切り口・キーワードで語る事ができる点が、現代でもなお彼の人気を不動のものにしているゆえなのだろう。

#### ——ふたつの最期の言葉

さて、そんな人気者政宗の辞世だが、こちらは亡くなる5カ月ほど前、国元で鹿狩りをした際詠んだ1首である。この頃、すでに死期が近いことを自覚していた彼は、時の將軍家光に最後の挨拶をしたり、周囲の人々へ遺品になるものを配ったりと、病苦をおして死に臨む準備をしていく。そういった状況の中詠まれたこの辞世は、彼の力強さや気風のよさが反映され、まさに「伊達者」の語源とされてい

る人らしい詠みぶりだと感じる。

故意か偶然か、政宗のトレードマークともいえる兜の前立ては三日月である。この三日月、一説では弓矢の神として中世以降の武士たちに信仰された妙見菩薩に由来しているといわれている。だとすれば、「くもりなき 心の月を さきたてて」とは、「心中にある妙見菩薩への揺るぎない信仰を道しるべに」という意味も含まれているのだろうか。

また「浮世のやみを はれてこそゆけ」には、行く手にどのような困難が待ち受けていようと、それらを乗り越えて突き進まんとする強い気概が感じられる。だれに頼るでもなく、己自身の力で闇を晴らしていこうとする姿勢は、いかにも独立独歩の戦国武将らしい。実際政宗も己の生き方に誇りを持っていただろうし、それを押し通しながら戦乱の世を最後まで生き抜けたことに、我ながらよくぞやりきったという万感の思いもあっただろう。

ただ実は政宗、臨終間際にはこんなことも言っている。「若い時から度々死線を越えてきて、むげに畳の上でこのように死ぬとは思ってもよらなかった。くやしくてたまらない。(中略)子どもに戦のやり方を伝授しつつ、戦死するならばどんなにうれしかろうに」。死に様は「侍」にとって、自己表現の集大成である。畳の上での大往生が集大成だと思われるのは、生涯そのものが戦場だった政宗にはたえられなかったのかもしれない。

徳川家康より24歳年下だった彼は、「遅れてきた英雄」と呼ばれることもある。一個人としてやりきったという万感と、「侍」として全力を出し切れなかったことに対する無念。錯綜するふたつの最期の言葉は、戦国武将「伊達政宗」の知られざる葛藤を私たちに示唆してくれる。

(執筆/ライター 青山繁樹)